

## 放射光分野からの島津賞受賞：菅滋正教授

尾嶋正治（東京大学大学院工学系研究科）

このたび大阪大学大学院基礎工学研究科の菅滋正教授が高精度高分解能放射光分光法の開発と応用の業績で第26回島津賞を受賞されました。心よりお祝い申し上げます。

菅先生は、我が国の第一世代の放射光研究者が建設に成功し、東京大学物性研究所（物性研）に移管された世界最初の放射光専用の電子ストリーミング SOR-RING の維持管理・運転及びその装置を用いた共同利用研究を行なうために設立された軌道放射物性研究施設の最初の専任スタッフとして、1976年、同研究所に着任されました。その後、在任の期間を通して全国共同利用のための性能向上や我が国の放射光研究の発展に貢献されました。聞くところによりますと、朝9時に専任スタッフ5~7名がほぼ全員総出で電子入射を開始し、一日に3,4度の入射を行い、深夜まであるいは土日にまたがる運転が常であったとのこと。共同利用研究者を大切にされ、同氏も他のスタッフと一緒にリングの運転ローテーションに加わり、加速器の保守、測定器の開発・性能向上、共同利用の世話と、目の回る忙しさだったようです。それでも残された時間で助手の谷口先生（現広島大副学長）や当時院生だった辛先生（現物性研教授）、生天目先生（現広島大教授）等と一緒に研究されていたそうです。また、若いスタッフを日本学術振興会の日独2国間共同研究の形で在外研究に送り出す、といった国際的視野を持っておられました。

フォトンファクトリーに物性研独自のビームライン（BL18, 19）の建設も終わった時点で、全国大学共同利用研である物性研究所には常に若い血を入れて活性化をはかるべきとの強い信念に従って大阪大学に転出されたと聞いております。私が放射光学会の行事幹事を務めていた時に、神戸国際会議場で第7回放射光学会年会を開催しましたが、実行委員長の菅先生のもとで副委員長として一緒に仕事をし、てきぱきとした的確な指示と放射光の若手研究者を育てるという強い意欲に大いに敬服いたしました。私は当時NTT研究所にいましたが、菅先生は民間の放射光研究者の成果を正しく評価されていました。公平さが全てに優先すること、そして若手を育てること、の2つを肝に銘じて教育研究活動を行っています。

菅先生はSOR-RINGとフォトンファクトリーでの装置建設・研究経験に基づきSPring-8に当時利用研究者誰もが構想しなかった軟X線ビームライン建設を提案され、



光学系・測定系建設の中核的役割を果たされました。この twin-helical アンジュレーター光源は物性研時代の加速器担当助手だった北村さん（のち理研主任研究員）の提案によるもので、熱負荷の心配のない素晴らしい光源として今日でも高い性能を維持しています。この光源を用いた世界最高分解能の軟X線ビームライン（BL25SU）の建設、BL25SUに設置された装置を用いた強相関電子系のバルク敏感光電子分光、同じくバルク敏感3次元角度分解光電子分光、さらに他のビームラインで発展させつつあるバルク敏感な硬X光電子分光だけでなく、光電子顕微鏡によるナノ磁性体の磁区構造のパイオニア的研究など、数多くの世界的研究成果を生み出してこられました。東京大学物性研究所ならびに大阪大学大学院基礎工学研究科の同研究室からは31年間の間に、放射光を担う多数の若手研究者を輩出されており、教育者としての放射光分野への貢献は極めて大きいと思っています。

現在はさらにナノ磁性体を目指すスピン偏極走査トンネル顕微鏡を用いた分光や超高速磁気記録の研究にも挑戦されていると聞いております。

今後ますますの研究のご発展とご健康をお祈りして、お祝いとさせていただきます。なお授賞式は2月22日に京都ホテルオークラで行われました。93歳になられる島津科学技術振興財団岡本理事長（もと京都大学総長）からの受賞のスナップ写真です。